

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ 石清尾八幡宮と峰山山麓を訪ねる

講師 豊島 英夫さん

(高松市文化財保護協会副会長)

平成20年5月25日(日)

共催 高松市歴史民俗協会
高松市教育委員会

一 石清尾八幡宮



高松市の市街地の西南に、家族で憩える峰山公園を擁し市民の手軽なハイキングコースともなっている石清尾山（232メートル）がある。その尾根が東方に伸びる亀命山の中腹に、高松市民の氏神である石清尾八幡宮が鎮座している。

1 神明鳥居

参道を西に行くと、「神明鳥居」が建てられている。戦前には、一の鳥居・二の鳥居・三の鳥居、と呼ぶ鳥居が建っていたが、交通の障害となるためか撤去され、今はこの鳥居のみが残っている。

2 石灯籠

広場の西詰めに長明燈と記された高さ五メートルの瀟洒な石灯籠が石積みの上に建てられている。「神前形石灯籠」と呼ぶこの燈籠には、天保八年丁酉（ひのととり）三月建と記され、どっしりとした宝珠がおさまる笠は先端を撥ね上げ、竿は裾広がりのは撥形である。

その昔、電灯がなかった頃、この燈籠の火袋に灯心の火が点され、暗闇の参道を照らしたことだろう。

3 唐獅子

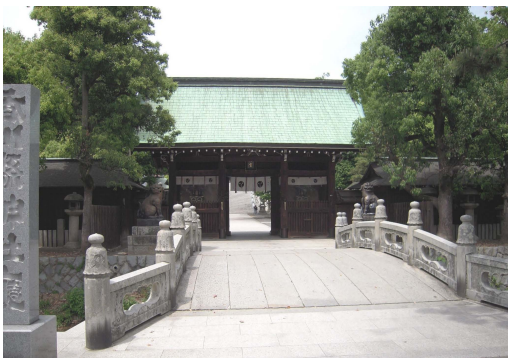
燈籠の西隣に、阿吽の形相をした唐獅子が石積み基壇に前足を立てて座り、参詣者を見つめている。この獅子は、魔よけのために設置され、天保十二歳十二月吉日建立と記されている。台座には賛同者であろうか、四百余名の屋号などが、びっしりと記されている。

4 太鼓橋

門前の濠の幅は約6メートル、摺鉢谷の川水が流れ、神社北側の池に流れ込んでいる。この濠に架けられた石造りの太鼓橋は、流れの中央に建つ橋脚に向かって長さ約三メートル幅六十センチ厚さ三十センチの緩い勾配を持ち、片側八枚、両側十八枚の頑丈な石材を使って架けられている。欄干柱頭には「あほり烏賊」が彫られ、欄間（らんま）模様も興味深い。

5 隨身門

橋を渡った西袂に、焼き物の唐獅子が阿吽の形相をして座っている。黒光りする像は石



像と違い生々しい迫力である。

門は銅版葺・切妻造りの八脚門で、「八幡宮」の扁額と神社の紋所である「三つ巴」が掲げられている。中央に門扉があり、参詣人が通行する。

その左右には、ガラス張りの奥に、彩色された衣冠束帯を身にまとい、剣を帯び、弓矢を持った武者が将棋に座って参詣人を見つめている。この武者は、神に隨身して護衛に当たる「兵仗」（ひょうじょう）で、この門は「隨身門」と呼ばれる。

6 手水舎

参道を右に折れると、「手水舎」がある。参詣者は、石造りの盥に注がれている水を柄杓で汲み上げて手を洗い心身を清める。大きな岩石を彫った盥盤の上に柄杓が並び、その横に石蓋が見える。その昔、使用されていた「井戸」だろうか。正面の欄干に「七福神」の中の布袋和尚・寿老人・福祿寿の三神が座っている。切妻の破風に懸魚（げぎよ）が下げられ、梁の上の「大瓶束と笈形模様」、「渦巻上の亀と欄間に遊ぶ雌雄の鶴」。背面の欄間に「獅子の親子」といった装飾が見られる。



7 歴代藩主奉献の石灯籠

棒瓦葺きの「北門」と呼ぶ高麗門がある。北門は現在「開かずの門」となっている。この門から、西方の絵馬同堂下まで、玉垣が続いている。玉垣の外側、濠に添って「雪見燈籠」が立っている。その昔、雪の夜にこの燈籠に火が点され、水面に火影がゆれていた。

北門の南側に高松藩第十一代藩主の燈籠がある。この燈籠は上から「宝珠・請花・露盤」、「六角形のむくりを持った笠」、「四角形の火袋と日輪」、「四角形の中台と単弁の蓮弁」、「四角形の柱」、「四角形の基礎と反花」と言った構成である。近年になって改修された石畳の参道が続くその両側に歴代藩主奉献の石燈が並んでいる。

8 社殿の造営



下拝殿と神木銀杏

石清尾八幡宮の由緒をたどると、

祭神は京都八幡市の石清水八幡宮の

神を勧請し、社殿は亀命山（現社殿の後背地）の頂上にあり、別名赤塔山とも呼ばれていたという。この社殿を、高松藩祖松平頼重公が鶴岡八幡宮（神奈川県鎌倉市）の様式に習い、現在地に移し、吹き抜けの拝殿と石段の左右に銀杏の木を植樹したのだろうか。



9 文学碑・句碑

栗山臥風顕彰碑

参道の中程、右側に「诗情吟魂」と大書された顕彰碑が立っている。この碑には、日本の誇と題する詩文が記されている。この漢詩の作者栗山臥風は本名栗山茂、明治三十三年生高松高等商業学校次いで香川大学の教授を務めた。また吟道臥風流を創始して宗家として普及に努める一方、吟剣詩舞道総連盟の設立にあたりその理事長となり詩吟文化の普及発展につとめた。

権名六郎顕彰碑

明治二十九年生。香川県立図書館長・香川県社会教育課長・日米文化会館長を務める。

三木杜雨の句碑

本名三木嘉光。明治三十六年生。香川県下各地の高等学校校長、高松市教育長を歴任。若くして高浜虚子先生に師事し、俳歴五十余年、紫苑を主宰し同好会の講師を務めた。高松藩ゆかりの「水任流泳法」の師範としても活躍した。



東原秋草の句碑

明治三十八年生。早くより俳句をはじめ、四国財務局句会及び石清尾句会の運営に尽力、ホトトギス俳句一筋に進む。昭和四十年二月より郷土排紙紫苑の編集発行に当たり、傍ら各地句会にて後進を指導、現在同誌紫苑集選者並びに石清尾句会講師。

国方きいちの句碑

本名喜一。明治二十七年生。永く教職にあり敦厚温容の士。若くして句作の道に入り写生俳句に徹する。ホトトギス紫苑による。ホトトギス同人石清尾文化会俳句部会講師を務める。

荒木暢夫の歌碑

明治二十六年生。北原白秋門下の長老にして大正四年「巡禮詩社」に入社、その後短歌雑誌「香蘭」「多磨」などの選者となり、晩年には「形式」同人として活躍。また香川県歌人会名誉会長として後進の育成に努め、珠玉の歌集「白塩集」を遺した。

川村知足の歌碑

本名は藤右衛門。旧高松藩士で、俳諧和歌を能くした。

佐々木令山の句碑

本名は礼三。高松市百間町に生まれ、医を業とし、俳句をよくした。ホトトギス同人で、昭和七年三月同人誌「屋島」を創刊し、後進の育成に尽くされた。

二 峰山墓地先賢の墓碑

石清尾八幡宮からJ R高德本線の南側に出て、摺鉢谷川に添って坂道を登る。さらに登ると右側に市営「摺鉢谷墓地」の墓石群が並んでいる。坂道の突き当たりにさぬき老人ホームがある。このホームの南隣の傾斜地に市営の「峰山墓地」があり、この中に「高松益壮會」、「高松市教育部會」と記された先賢の墓石と顕彰碑が並んでいる。

《藩難義士老臣 小夫兵庫正容君墓》

文久三年（一八六三年）家老となる。家老小河久成とともに



に鳥羽伏見の戦いの際官軍と対戦奮砲したので、高松藩は朝敵となった。朝敵事件の責任者として正覚寺で「忠誠」と揮毫を残し切腹、藩難に準じた。享年四十三歳。

《後藤芝山先生墓所》

藩校講道館の初代総裁。守屋義門について漢学を習い、末頼もしい秀才であることが、藩主の耳に入り第五代藩主松頼恭は芝山を藩費で平戸の昌平校に遊学させた。三十四歳の時高松に帰り、藩主頼恭の侍講となり藩主の子たちの教育にもあたった。第6代藩主頼真は芝山の献策を取り上げて藩校講道館を建てた。柴野栗山は多くの門弟の中でもとりわけ知られている。

《玉楮象谷翁墓所》

漆芸家。象谷塗の元祖。第九代藩主頼恕から「玉楮」姓を賜って以来玉楮象谷を名乗った。象谷は中年時代に彫刻漆器の技法を懸命に研修し、国内はもちろん中国の存清・タイビルマの蒟醬塗りなどの技法を研究した。



《後藤漆谷先生墓碑》

後藤芝山・深井鶏林について学んだ。柴野栗山・長町竹石ら多くの風流人と別邸築地の名園「老松園」で交わった。頼山陽に知られ、詩は巧みで、書家として名が通っていた。山田郡新田の漆谷に別荘があり、雅号の漆谷は別荘の地名を取ったものだといわれている。

《藩難義士 小河又右衛門久成君墓》

高松藩家老。朝敵事件の責任をとり切腹。文、武、書の道を治め、慶応二年（一八六六年）家老となった。慶応四年（一八六八年）鳥羽伏見の戦の際、朝敵事件を起こした。檀那寺・弘憲寺で切腹し、藩難に準じた。

《木村黙老君墓碑》

読書・文筆家。高松藩士。講道館に学び、その成績優秀、近習に選ばれた。後には、第九代藩主頼恕に取り立てられ、家老となり、坂出塩田の開墾・砂糖為替法などを考案した。また、滝沢馬琴と親交があり、江戸藩邸時代はとりわけ親しい間柄であった。

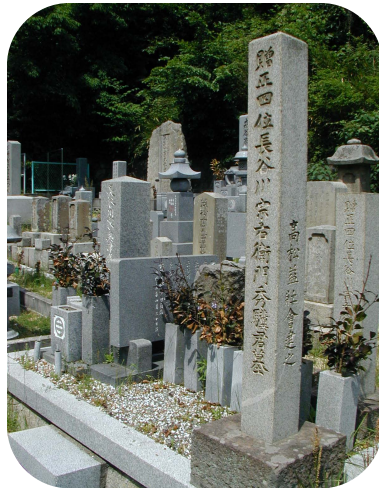


黙老は絵も上手で、俳優・平賀源内の肖像画など有名である。このほか文学関係の著述には「国学小説通」「京撰作者孝」「女仙外史」などがある。

《長谷川宗右衛門の墓碑》

高松藩士・勤皇家。宗右衛門は第九代藩主頼恕の近習で、十代頼胤・十一代頼聡にも仕えた。鳥羽伏見の戦で高松藩が朝敵とされた時、藩内勤皇党の首領松平左近と謀り、京都に出て、東奔西走して陳情、寛典に處せられんこと願った。高松城内の籠城決戦の藩論は松平左近の一喝によって無血開城となった。

このほか高松藩士となった大楠公の子孫楠家の墓碑、教育家橋本仙太郎の墓所、史家梶原藍渠先生の墓碑、琴舎 堀秀成翁の墓所、赤穂藩大石良雄の師・剣豪奥村無我先生墓碑などがある。



三 滝不動堂

宝形作りのお堂が滝壺の上に建っている。滝のお不動さんとして親しまれ、信仰を集めていこの滝不動堂は、番町五丁目の行泉寺の境外仏堂で、平成十年に改築され、明るくきれいになった。

滝壺の奥壁には、火焰を背にした不動明王立像が安置され、白衣に身を包んだ行者は、滝壺に下りて直立不動で立ち、滝水に打たれながら合掌、呪文を唱え、「水垢離の修行」をする。

毎月一回奉修される護摩供には、一般信者や市民も多く訪れている。

*なお、滝不動堂より上には今回行きませんが、参考までに講師の記事を次に載せておきます。

滝の上の車道を横切って西側の山路へ登り、右へ行くと改築された「薬師堂」があり、薬師如来を中心にして石仏数体が安置されている。



平成六年の改築前の薬師堂は、北側の断崖上に迫り出した「お堂」であった。それは「ぞき」の行場と、いわゆる断崖上に身を乗り出す「肝試し」がおこなわれたのだろう。さらにすすむと「役の行者像」などの石仏がぎっしりと並び立つ「大師堂」である。さらに石垣にそって坂道を登ると、不動明王が安置された「岩屋不動」のお堂である。明王は、行者を守護する仏であるという。さらに梅林・椿園などを散策しながら登ると視界が開けて広場に出る。この広場の北側、松林の中の岩塊上「八峰山青命坊」と刻まれた石柱と不動明王の石仏が立っている。広場の西方、尾根の斜面に小さな社殿がある。四国修験道のメッカ、石槌山の神を勧請したものという。近くの広場では「火の行」という「柴燈護摩」がおこなわれる。

讃岐は古くから、修験道とのかかわりが深いとされている。それは、山岳密教にかかわる高僧、弘法大師空海、智証大師圓珍、理源大師聖宝などが讃岐の出身であったことによるのだろうか。

